

新潟に住んでみて

国土交通省 北陸地方整備局 新潟国道事務所

調査課長 赤川 裕志



平成16年4月に北陸地方整備局新潟国道事務所へ赴任して1年半以上が過ぎました。「北の交差点」に執筆する機会を頂きましたので、新潟県及び新潟国道事務所の紹介をさせていただきます。

新潟県の概要

新潟県は、日本海沿岸のほぼ中央部に位置し、朝日山地、飯豊山地、越後山脈が東側に連なり、西側には西頸城山地及び白馬山地などがそびえています。これらの山岳に源を発する信濃川や阿賀野川など数多くの河川が日本海に注ぎ越後平野など広大で肥沃な平坦地を形成し、コシヒカリに代表される米については粗生産額ベースで全国1位となるなど、全国有数の食糧基地となっています。県の面積は12,582km²で全国第5位、人口は約246万人となっています。

新潟は、古くから日本海側の海陸交通の要衝として栄えてきましたが、昭和60年の上越新幹線の開業を始め、北陸・関越・上信越・磐越・日本海東北道の5つの高速道路、2,500m滑走路の新潟空港、中核国際港湾である新潟港などの交通体

系が整備され、高い拠点性を有しています。また、コシヒカリに代表されるお米はもとより、清酒、米菓、金属洋食器、ハウスウェア、金物、桐ダンスなどの木工製品、ニットや絹織物など伝統産業の宝庫でもあります。

県都である新潟市は、今年3月と10月に周辺の13市町村と合併し、人口約81万人の新・新潟市となり、平成19年4月の政令指定都市への移行を目指しています。

新潟国道事務所の概要

新潟国道事務所（以下「新国」と言います。）は、新潟県の人口の約6割を占める下越地方の直轄国道（一般国道7、8、49、113、116号）の改築・管理を担当しています。管理延長は約293kmに及び全国8位（北海道を除く）の管理延長を有しています。

新国では、「国土」と「交通」という幅広い分野において道路という社会資本を通じ、人々の生活の質の向上と活力ある地域社会の実現に貢献するため、「活力ある地域づくり」「安全・安心に暮

～新潟国道事務所の使命～

I 活力ある地域づくり

- ・地域間交流促進する道路ネットワークの形成
- ・都市圏の渋滞緩和と拠点都市新潟への時間圏の拡大
- ・交流・物流・経済活動拠点間の連絡の強化
- ・既存ストックを快適に使うための路上工事、道路管理の質的改善

II 安全・安心に暮らせる地域づくり

- ・道路交通における死傷事故の削減
- ・暮らしを支える道路ネットワークの安全性・信頼性の向上
- ・通年的な安全を確保する効率的な維持管理体制の確立

III 豊かな暮らしを実感できる地域づくり

- ・少子・高齢化社会に対応したバリアフリーの推進
- ・沿道環境・緑化・電線類地中化等による道路景観の改善
- ・歴史・文化的香りある美しいまちづくりの支援

IV 地域と行政が協働する地域づくり

- ・地域や市民と連携したみちづくり・まちづくり
- ・積極的な地域とのコミュニケーション、情報交流

らせる地域づくり」「豊かな暮らしを実感できる地域づくり」「地域と行政が協働する地域づくり」の4つの目標を掲げて様々な取り組みを進めています。

以下では、新国の話題・取り組み等についてその一部に紹介します。

新潟のシンボル～萬代橋

新潟市のシンボルとして親しまれている萬代橋は、新潟市の中心部を貫く信濃川に架けられた6連アーチ橋です。萬代橋は新潟市のメインストリートとなっている一般国道7号の一部を構成しており、一日あたり約47,000台（自動車）、歩行者約12,000人（歩行者（自転車を含む））の交通量があります。

萬代橋は、昨年、架橋75周年を迎えるとともに国の重要文化財に指定されました（国道に架かる橋としては、東京都の日本橋に次いで2例目）。これは、洗練されたデザインと建設当時の高い技術的達成度を示す遺構として価値が高いことが認められたためであり、萬代橋の文字通り、萬代までも後世に残していくこととなりました。

新国では、75周年記念事業として、橋が建設された当時の姿に復原する改修工事を行いました。照明灯及び橋の側面に設置されている橋側灯については、建設当時の素材である南部鋳物を使用するなど極力、建設当時の姿に復原することをコンセプトとしています。また、橋側灯の一部については市民からの募金により、市民からの寄付という形で設置されました。市民団体から始まった取り組みが地域全体に発展し、それらの活動に後押しされて重要文化財指定が実現したという経緯か



萬代橋

らも萬代橋が市民からいかに愛されているかがわかりいただけるかと思います。

日本一の交通量を誇る新潟バイパス

新潟都市圏の交通は、その7割を自動車交通が担い、北海道と同様、自動車への依存度が非常に高くなっています。また、新潟市では、規格の高い道路を使う割合が26%と全国平均の13%を大きく上回っています。これは、新潟都市圏においては、アクセスコントロールされた規格の高い直轄バイパスが約40kmに渡って整備されているためです。新国が管理しているバイパス網は新潟の経済活動の大動脈を担っており、中でも新潟バイパスでは、日あたりの交通量が昼間10万台を超え日本一の交通量を誇る区間があります（H11道路交通センサスベース）。

この新潟バイパスは、1960年代から70年代にかけて当時の北陸地方建設局の道路計画課長や新潟国道工事事務所長を務めた土屋雷蔵氏の「日本にも必ず高速交通の時代が来る。将来の幹線道路網を支える道をつくらねば禍根を残すことになる。」という確たる信念のもとに建設がなされたということで、伝説として語り継がれています。

現在、新潟バイパスは主として6車線での運用がなされていますが、建設当時は、盛土で4車線整備となっていました。盛土構造から擁壁構造とすることにより両側に更に1車線ずつ車線を増や



一般国道8号 新潟バイパス 弁天IC付近

すことができる構造上の工夫により、交通量の増加にも適切に対応でき、バイパス網は新潟市内の大動脈として社会・経済活動を支えています。

「にいがたのみちを快適に使う会」の取り組み

「にいがたのみちを快適に使う会」は、新潟市長を会長として平成15年度に設立された組織で、産業・経済・まちづくり・交通安全・福祉・マスコミなどの分野で活動する市民・市民団体より構成されており、「より賑わいと活力のある“にいがた”にしたい」という想いから、道路ユーザーの立場で道路が抱える様々な課題、問題点を取り上げ、その対応策について検討・提案を行う組織です。

活動内容として、行政と市民のつなぎ役として、一般の道路ユーザーからの意見（生の声）を基に問題解決を目指した道路政策への提言を行っています。

現在までの主な活動として、「高速道路の有効活用」を取り上げ、料金施策やスマートICの導

入について提言を行い、それが北陸自動車道黒埼パーキングエリアにおけるスマートICの実験実施につながっています。

むすびに

私自身、道外で事務所勤務をするのは初めてでしたが、同じ地方整備局内のそれぞれの事務所同士が互いに切磋琢磨しているという印象があります。一方で、発注業務と監督業務が分離されていること、また、主として工事・管理の最前線である出張所には係長になるまで配属されにくいことから、最初のうちはなかなか現場経験ができないという点で北海道は恵まれているとも感じています。

新潟では「ゆったり、のんびり、芯から気持ちがいい」ことを「じよんのび」と言います。新潟は、この“じよんのび”精神が息づいている豊かなところですよ。みなさんも、是非、新潟に“じよんのび”しにいらしてください。

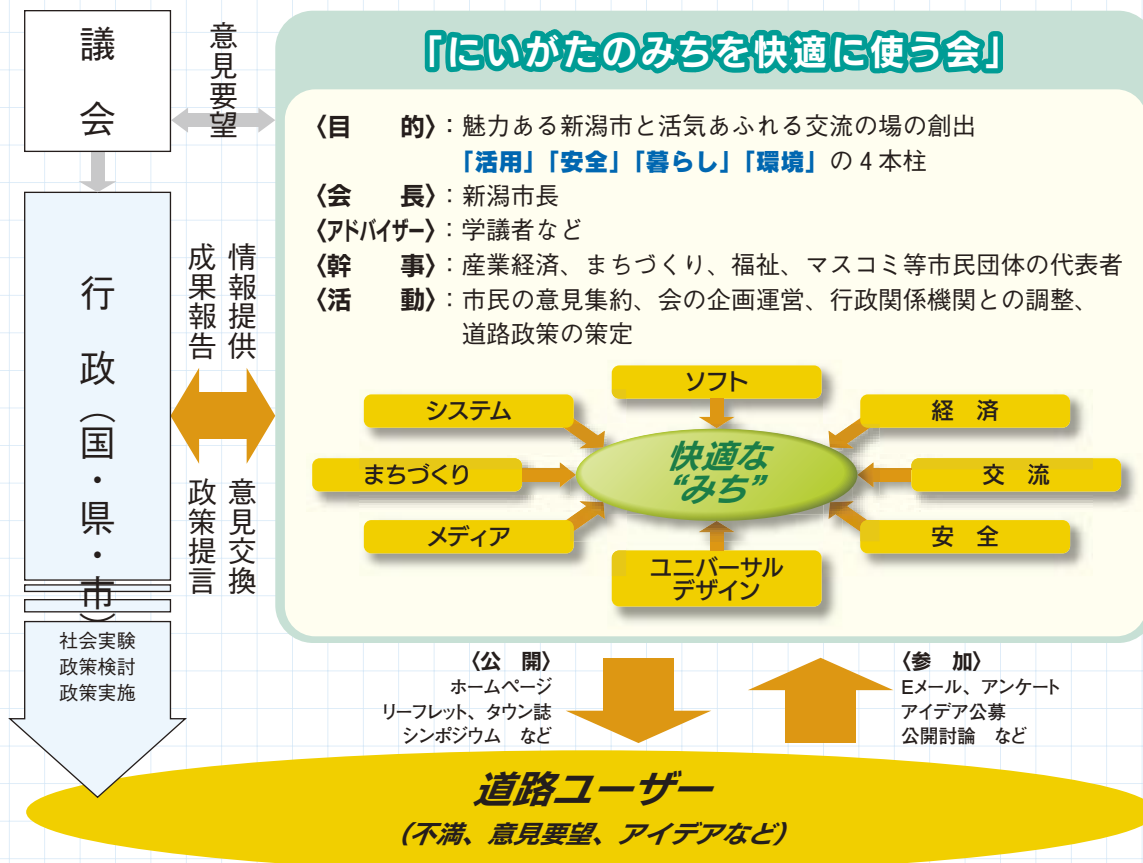


図 にいがたのみちを快適に使う会の活動イメージ